

【やや黄色い熱をおびた旅人】

2

イズント・シー・ラヴリィ

1997年7月

アスマラ  
(エリトリア)

原田宗典

それは、聴き覚えのある曲だった——。

まどろみの中で私は、耳を澄ます。

何という曲だったか……深いところに澱んでいる記憶を浚おうとする  
と、それに伴って少しずつ意識がはつきりしてくる。同時に、寝しなに  
ようやく鎮まりかけていた頭痛もまた、こめかみの辺りで疼き出す。

小さく呻きながら、寝返りをひとつ打つ。そのままうつ伏せになって、  
枕の中に顔を埋めようとする矢先、それが変に獣臭かったことを思い出  
して、私は反射的にウツと息を詰めた。

辺りは、ほんやりと薄暗い。

ややあつてから私は、眼鏡をかけたままであることに気づく。そして

大慌てで自分がどこにいるのか考えようとする。

紅海に面したアフリカ北東部の小国、エリトリア——その首都アスマラのホテルの一室に、私はいるのだった。アンバサダーという大袈裟な名前のこのホテルに滞在して、もう三日めになるのだが、未だにアフリカ大陸にいるという実感が伴わないのは何故だろう？ エリトリアは高地にある国で、長袖が必要だと予め聞いていたから、灼熱の太陽や密林や猛獣などを期待していたつもりはないのだが、私は自分がアフリカ大陸にいることをすぐに忘れてしまうのだった。

七月だった。

上体を起こして、私は防臭のつもりで枕に巻きつけておいたバスタオルがずれてないか、薄暗闇の中で確かめる。もつともこのバスタオルに

しても、生乾きの状態でタオル掛けにかかっている、いきなり顔を拭うのは憚られた代物だ。それを獣臭い枕に巻きつけたからといって、急に花園の夢が見られるわけではない。気休めにすぎないことは百も承知の上で、私は改めてバスタオルで枕をくるみ直してから、もう一度横になった。

その間もずっと途絶えることなく、例の曲は流れ続けていた。

寝起きの私を囁し立てるかのようになり、軽快で明るい調子の曲だ……誰の、何という曲だったか。私は知っているはずだった。束の間頭痛も枕の臭いも忘れて、小声で口遊んでみる。と、その時不意に、メロディラインを奏でていたサキソフォンが音を外し、まごついてなかなか取り返しがつかなくなった。周りから起きる失笑や冷やかしの拍手を耳にして、

初めて私はそれが生バンドの演奏であったことに気づいた。

すっかり目覚めているつもりでも、もしかしたら私はまだ寝惚けていたのかもしれない。てつきりレコードかCDをかけているのだとばかり思っていた。道理で聴き心地に妙な違和感があったはずだ。きわどいアドリブかと思っていたのも、実はただ単にヨレているだけだったのだ。おそらく奏者は皆、かなり酔っているのだろう。

金曜日の夜だった。

そういえばこのホテルの大して広くもないロビーの奥に、バーだからウンジだか、何しろ一杯やれそうなスペースがあったのを、私は思い出した。折しも週末の夜とあって、あそこに生バンドが入ったのだ。頭さえ痛くならなければ、私も今頃は取材班の三人と一緒に、酔っぱらって

いるはずだった。しかし暗くなるにつれ、頭痛はじんじんと激しさを増してきて、とても飲みにいける状態ではなかったのだ。

私はベッドの上で寝返りをうち、改めて室内の薄暗闇に目を凝らした。右手のライティング・デスクの片隅に置いてある、エビアンのペットボトルのシルエット……。見るなりたちまち喉の渴きを覚えたが、それはベッドに入る前に、アスピリンと一緒に飲み干してしまつて、空のはずだ。もう一本のエビアンは、バスルームの洗面台のボウルに水を張つて、浸けてある。

すぐにも飲みたいのは山々だったが、起き上がるのはひどく億劫だった。それに、洗面所へ行くには、ちよつとした勇氣も必要だったのだ。実は今朝、洗面台の水道で顔を洗つた直後のことだ。ふと目の前の鏡

を見ると、そこには大人の掌ほどもある蛾が、何気なくとまっていた。太い胴体は赤茶と黒の縞紋様で、羽の全面に鱗粉のまわりついた厭らしい毛が生えている——私は背筋に電気を走らせて跳びのき、便器に蹴つまずいて、危うく仰向けにすっ転びそうになった。バランスを失い、宙を搔いて泳ぐような格好で洗面所を飛び出し、大慌てで扉を閉ざしたのだったが……あの後、蛾のやつはどうなったろう？ ホテルのルームメイクのおばさんが気づいて、追い出してくれていればよいのだが。

昼間、ロケバスの中で、地元ガイドのマコーネン氏に聞いたところによると、この一帯には、確かに毒のある蛾も何種類か棲息しているらしい。その鱗粉が目に入って、運悪く失明にいたった人も少なくないのだという。

「でも、ドクのガーはそんなにおつきいないですね」

マコーネン氏は苦笑まじりにそう言つて、平気へーキと私の肩を叩いてくれたのだつたが、私は全然平気ではいられなかつた。第一彼にとつて、掌大の蛾は大きいのか小さいのか、それすらも見当がつかないのだから。

ベッドの中で私は、あの時、一瞬にして目に焼きついてしまった毒々しい蛾の姿を反芻し、思わず身震いをした。そして自分は、あんなものが平気で棲息するような土地に来てしまったわけだ、と今さらながらに思い知つたのだつた。

一階から響いてくる酔客たちのざわめきは、いつのまにかおさまりつつあつた。ふッと急に静かになつたかと思うと、もう一度曲の頭から演



奏が始まった——いかにも慎重な指遣いでキーボードが先行し、ややあつてからサキソフォンが入ってくる。失敗して開き直ったのか、さつきよりもずっと威勢のいい吹きっぷりだ。

耳をそば立て、それが何という曲だったか、私は改めて記憶を辿り始める……と、すぐに鈍い頭痛が横槍を入れてくる。病気、というよりも、そうなるのはこの街自体が高地にあるためなのだろう。思いの外空気が薄くて、ホテルの階段を三階まで上るだけでも、息が切れるほどなのだ。生バンドの演奏がやけに下手糞なもの、ひよっとしたら空気のせいかもしれない。

アフリカ、か。

私はまた自分がどこにいるのかを確かめるように、呟いてみる。アフ

リカ、エリトリア、アスマラ、アンバサダー、と順に眩くと、何やら呪文のように思えてくる。そんなところに今、自分は居るのだ。

何もかも勉強不足のまま日本を後にしてしまった私は、到着数時間前のエチオピア航空機内で、ようやくこれから自分が訪れようとする国、エリトリアについての知識をにわかには仕込む有様であった。番組の若いスタッフが掻き集めてきてくれた資料の中に、ナシヨナルジオグラフィック誌の日本版の記事のコピーが数頁あって、私はまずこれに目を通した。

「胸が熱くなる国、エリトリア」

そんな見出しが、控えめにレイアウトされている。筆者はおそらく白人青年だろう、初めて訪れたエリトリアの印象を、駆け足でまとめたものだ。

そこには、エチオピアとの三十年にわたる戦争を闘い抜いて、ようやく三年前に独立を勝ちえた若き国、エリトリアの国内事情が、キレのいい文体で紹介されていた。三十年戦争によって、国内はすっかり荒廃し、中でもエチオピア軍の手で根こそぎなぎ倒され、刈り取られて消滅せしめられた森や林は、目を覆いたくなる有様である。ゲリラたちが身を隠すことができないように、三十年もかけてそんな馬鹿なことをしたのだという。筆者は、エリトリア国内に残る戦争の傷痕をひとしきり強調しておいてから、「しかし」と続けていた。エリトリアは人の胸を熱くさせる国である。数あるアフリカの独立国の中で、アメリカにノーと言った誇り高い国は、エリトリアだけである。彼らは、三十年闘ってきたエチオピア軍の背後に、最初はソビエトの影があり、続いてアメリカの影

があつたことを知っている。アフリカ大陸のこんな辺境の地を、何故大  
国たちがこぞって手に入れたがるのか？ それはエリトリアが高地に在  
ることと関係している——というのもこの地に大型のレーダーを設置す  
れば、南半球のほぼ全域の情報がカバーできるらしいのだ。だからソビ  
エトもアメリカもエチオピア軍に肩入れして、この小さな高地国を手  
入れようと躍起になったのだ。そしていざ戦争が終わってみると、急に  
友人面をしてすり寄ってきたアメリカに対して、エリトリアはノーと言  
ったのだ。確かに戦争で国土は荒れはてたけれども、人々の心は荒廃し  
ていなかった。現在、エリトリアの国内では、国民のボランティアに  
よって、植林が進んでいる。筆者は、労働大臣自らが上半身裸になって  
作業をしている様子を伝え、こんな大臣が世界中のどこにいるだろうか

と問いかけていた。そして自分自身も、街でふとこんな光景を見かけた  
と紹介していた——自分の前を歩いていたご婦人が、舗道の真ん中で  
急に立ち止まって、しゃがみ込んだのだ。落とし物かな、と思って目を  
やると、彼女は舗道の敷石のずれたやつを黙々と直していたのだという。  
誰かに命令されたのではないし、もちろん自分の家の前というわけでも  
ない。三十年も傷つけられてきたこの国、この街を、国民の一人一人が  
大切にし、愛さなければ、という意識が高いのだ。その気持が、訪れる  
者の胸を熱くするのだ——と筆者は結んでいた。

サキソフォンがまたもや音を外してヨレそうになる。バンド全体が一  
瞬緊張する。が、奏者は何とか持ち直して、またメロデイラインを奏で  
始めた。それはあまりにもあっけらかんと明るい曲調であった。苛立た

しいのは、その曲名がまだ思い出せないことだ。何度も寝返りをうっている内に、私は再びまどろみ始めていたのかもしれない。

目をつぶると、その日の昼間、アスマラの郊外で目にした風景がぼんやりと浮かんでくる――。

いちめんの荒野。そういう風景を、私は初めて目の当たりにしたのだ。行けども行けども土と石と岩だけの荒野。草も樹木も一本も生えていない土気色の世界。それが悲しくなるほど青い空の下に延々と続くのだ。おんぼろのロケバスで悪路を二時間以上も走った挙句、私たちが一行は道に迷った。遠くの岩山の傍らに見えた建物に向かって行って、誰かに道を尋ねるべく、車から外に降り立った私は、しばらく我が目を疑った。

そこは、旧約聖書に出てきそうな眺めの場所だった。

小高い岩山の中腹で、眼下にいちめんの荒野を見下ろし、はるかに巨大な方舟のような山々が連なるのを見渡す——そんな場所に私はいた。道を尋ねた相手というのが、羊飼いの老人と子供たちで、辺りには薄汚れた羊たちが何十頭も群れていた。この時点で、既にひどい頭痛に苦しめられていた私は、ぼうっとした痛みの向こう側に、その旧約聖書じみた世界を見た。

正午だった。陽の光は、この世からすべての影を失くすほど強烈だった。

年寄りの羊飼いが手にした杖の上の方は、聖書の挿絵か何かで見たのと同じく、ぐるりと渦を巻く形をしていた。浅黒い肌をした、笑うと白

い齒の際立つ子供たちが、私たちを遠巻きにして、物珍しそうに眺めている。黄色人種を見るなんて、きっと初めてなのだろう。どの子も、どう反応したらよいものか、無邪気に戸惑っている。そして彼らの背後には、はてしない荒野が広がっている。

こんな世界で、こんな場所で、現実にくらして生きて暮らしている人が目の前にいる。そのこと自体が私にとっては感動的だった。そこには何か敬意を払うべき、潔い生の姿があった。凄いと私は徐々に激しくなってくる頭痛の中で思った。それは、自堕落な日々を送ってきた私にとって、自分が情けなく、恥ずかしく思えるような風景であった。

しかもエリトリアの国民たちは皆、総出でこの荒野に一本一本植林をしているのだ。羊飼いの一行と別れた後、私は道端に屈んでせつせと苗



木を植えている人を何人も見た。学生もいれば子供もいるし、老人も中年男性もいる。誰もが必死になって、国土に緑を取り戻そうとしているのだ。大地にようやく根を下ろしたばかりの、あまりにも細く貧しい苗木たち。荒野を吹きわたる土まじりの風に逆らい、健気にも空に向かつて伸びようとするその姿は、エリトリアの人たちの姿と重なり合うものがある。

階下から響いてくるサキソフォンの調べに合わせて口遊みながら、私は、自分自身が彼らのように健気だった時代があったろうか、と自問した。学生時代——まだ二十歳になる前の自分の姿が、すぐに思い浮かんだ。同時に、私はああそうか、そうだったと思い出した。今聴いているこの曲の名前は「イズント・シー・ラヴリイ」。ステイビー・ワンダー

の曲だ。初めて聴いたのは、十九歳の頃だった。高田馬場の駅前にあるジャズ喫茶で、当時仲の良かったG君と一緒に聴いたのだ。その独特の明るい曲調に惹かれた私が、音楽通のG君に曲名を尋ねると、彼は、そんなことも知らないのかといった顔をした。

「『イズント・シー・ラヴリイ』だよ。ステイビー・ワンダーの名曲だぜ」

彼はちよつと得意げに答え、どこで仕入れたものか、この曲にまつわるエピソードまで教えてくれたのだった。

「ほら、ステイビー・ワンダーって目、見えないじゃない。そんな盲目の彼に、初めて娘が生まれた時に作ったのが、この曲だよ。イズント・シー・ラヴリイ」

彼女は可愛いだろう？ 彼女は可愛いよね？ 娘が生まれて、手放しで喜ぶ盲目のステイービー・ワンダー——そういう曲が「イズント・シー・ラヴリー」であることを私は思い出した。

彼女は可愛いだろう？ ねえ、彼女は可愛いよね？

そう謡うフレーズが何度も繰り返される。生バンドのサキソフォンは幾分ヨレたぶん、可愛いよね、と訴えかける感じが却って出ている。

彼女は可愛いだろう？ ねえ、彼女は可愛いよね？

あの時、G君はこの曲に「可愛いアイシャ」という邦題がついていることも教えてくれたのだった。アイシャというのは、ステイービー・ワンダーの娘の名前だという。私はG君の博学ぶりに、素直に感心して聞き入ったものだった。

彼女は可愛いだろう？　ねえ、彼女は可愛いよね？

そのメロディと一緒に口遊んでいる内に、私は不意に目頭が熱くなってきた。今、自分がいるこのエリトリアもまた、「彼女は可愛いよね？」と言って祝福してあげたくなるような国である。私は、昼間に見た羊飼いの風景を反芻し、同時に自分が少しも健気ではない人間になってしまったことを思った。

彼女は可愛いだろう？　ねえ、エリトリアは可愛いよね？

いつのまにか涙が私の頬をつたい、獣臭い枕を濡らしていた。一体ぜんたい何のための涙だったのか？　私の方こそ尋ねたい。アフリカのエリトリアのアスマラのアンバサダーホテルの一室に一人でいて、生バンドの下手糞な「イズント・シー・ラヴリイ」を聴きながら、私は何のた

めに泣いたのか。健気で可愛いエリトリアのため？　そこで演奏された「イズント・シー・ラヴリイ」という曲のため？　或いはその曲を初めて聴いた頃の、健気だった自分の思い出のため？

私には分からなかった——何のために泣いているのか分からないまま、私は涙を流していた。バスタオルを巻いた獣臭い枕はすっかり濡れて、ますます使い心地の悪いものになってしまった。

彼女は可愛いだろう？　ねえ、彼女は可愛いよね？

その旋律が繰り返されるごとに、金曜の夜が更けていく。私はベッドに横になったまま、またもや自分がどこにいるのか見失いそうになっていた。